街プレーバック

絵本「麦畑になれなかった屋根たち」@武蔵野中央公園

戦火に消えた飛行機工場の空を舞え

吉祥寺駅からバスで北西へ約10分。東京都武蔵野市八幡町の都立武蔵野中央公園に広がる約5万平方㍍の原っぱは、紙飛行機や模型飛行機の愛好家らの聖地だ。休日も平日も、自慢の機体を青空に飛ばす人たちでにぎわう。

公園を含む一帯は太平洋戦争中、零戦や隼（はやぶさ）など戦闘機のエンジンを造る中島飛行機の工場だった。畑の中にのこぎり屋根が立ち並んだのは1938年のことだ。原っぱの約10倍の敷地で5万人近くが働いていた。

風をよみ、翼の角度を調整しながら、手作りの紙飛行機をゴムで飛ばす＝東京都武蔵野市

主人公の少年工は44年11月24日、工場で初めて空襲にあう。B29爆撃機による東京空襲の第一陣だった。工員50人以上が命を失った。数日後、軍の命令でペンキ職人が集められた。その数1千人。のこぎり屋根が1日で青や緑に染まった。周りの麦畑に似せてB29の目を欺くつもりだった。

武蔵野市の塗装業、小峰光弘さん(77)は、屋根の塗装に加わった父親の体から塗料の強烈な匂いがしたのを覚えている。「広い屋根をハケで塗るのは相当大変だったでしょう」

しかし、ペンキ職人たちの努力は徒労に終わる。米軍は精密な航空写真を撮影していたのだ。工場に狙いを定めた空襲は、終戦直前の45年8月8日まで9回続いた。死者は工員だけで200人以上。周辺に住む人たちの犠牲はそれより多かったと考えられている。

少年工は緑色に塗られた屋根の破片を手に、焼け跡にたたずむ。「ペンキ屋を総動員した総力戦も結局はまったくの無駄だった」と、知人の話をもとに絵本を作った藤田のぼるさん(64)は言う。「終戦間際にはあちこちで同じような悲劇が起きていたと思う」

焼け跡は進駐軍の宿舎などを経て89年、公園になった。原っぱのまま残してほしい。市民とともに熱心に掛け合ったのは紙飛行機の愛好家らだった。

（文・竹越萌子、写真・上田潤人）

メモリー

「麦畑になれなかった屋根たち」は1995年に童心社から刊行（絶版）。絵は「漫画家残酷物語」「花いちもんめ」などで知られる漫画家の永島慎二（故人）が担当した。「永島さんも紙飛行機愛好家で、公園にふらりとやってきた」と日本紙飛行機協会会長の二宮康明さん(88)。写真は中島飛行機武蔵製作所（撮影当時は武蔵野製作所）の本館前に整列する従業員＝「富士重工業50年史」から。同製作所だけで軍用機用エンジンのシェアの約3割を占めた。

スポット

公園東側の都営住宅敷地内に中島飛行機武蔵製作所の唯一の遺構、旧変電室の建物が残る。今年3月に取り壊しが決まったが、研究者や市民らでつくる「武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会」が反対を訴えている。14日㊍後1時半、武蔵境駅前の武蔵野プレイスで同会の牛田守彦副代表が武蔵野の空襲について講演する。☎事務局長・秋山さん(0422・52・0288)。

◆「街プレーバック」は来週休みます。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。